

# スラヴ語の不定人称文 と無人称文について

山 田 勇

## はじめに

本稿では、スラヴ語の不定人称文と無人称文について、特に文の主辞、賓辞、補語の統語関係を軸に分析される。英語を始めとする印欧祖語を起源とするヨーロッパの諸語を瞥見すると、これらの主辞、賓辞、補語の文要素のうち、比較的主辞の取り立てが明確であるように思われる。例えば、自然現象を表現する場合にも、英語では、平叙文では特定の代名詞 *it* を仮主語として、文頭に立て、この種の記述を行っている。しかしスラヴ地域の東地区で用いられている現代ロシア語では、主体を実感しない無人称動詞構文が発達しているので、*Светает.* で「夜が明けている」ことを表現できる。この動詞は不定法が *светать* で、その三人称単数形を主語を表記することなく上述の光景を記述するのである。英語ではこの場合、*The day is breaking.* となり、意義通りの主語が立てられる。これに対して、スラヴ地域の西地区で用いられている現代スロヴァキア語でも *Svitá* とロシア語と同じ無人称構文が使われる。

更に、ロシア語では動詞の活用形から複数の主体を動作主として認定できるが、その主体が誰であるのかが判然としない一連の表現構文がある。これは英語の *they* にあたる仮主語的であるが、その言葉自体は記述されず、述語の活用形から諒解できるに留まる。例えば、人の出会いの場面で、相手の名前を聞く様な場面では次のような応答が交わされる。— *Как вас зовут?* — *Меня зовут Сергей Александрович.* 最初のシーンでは「あなたのことを世間の人は何と呼

んでいるのですか。」として、相手の名前を質す。この動詞は三人称複数であることは疑いが無いが、意識には上らない。訊ねられた方も「自分のことを世間の人にはセルゲイ・アレクサンドルと呼び慣わしている。」とすげない。統語上のみ主体を認識させ、けして表現の表層に表さないのである。これは不定人称文とよばれる。この様な東スラヴ語の特殊な文タイプの分布状態の現状から我々は、これら言語では、他のヨーロッパ諸語に比較して、言語表現から、主語の意識が弱められる傾向にあることを看取できる。

さてこの場合、同じスラヴ地域の西地区で用いられている現代ポーランド語では、— *Jak się nazywasz?* — *Nazywam się Sergiej Aleksandrowicz.* と交わし会う。ここでは、それぞれの動詞が発話者の人称に一致した活用形をとっていることが知れる。同じ、スラヴ諸語の中にあっても、ロシア語は主辞に対する意識が少なくとも言語表現上は希薄であると観ぜられよう。

先に述べた、文の主辞、賓辞、補語の統語関係を論ずる場合、これに付随する幾らかの問題点を整理しながら、論証する必要が認められる。主辞や補語を取り上げるには、まず、それらの実体の性質に注目する必要がある。スラヴ語には名詞を活動するか、或いは少なくともそう実感される対象であるか否かにより認識世界を二分する範疇がある。これを名詞の活動体及び不活動体と名づけている。名詞にはまた動詞から名詞化する種類があり、これらと機能語が結合して、述語句を形成する。この時名詞は述語句の中で補語のように働くので、この様な現象がそれぞれの言語で顕著であるか否かも注目しなければならない。更に述語が補語をとるか否かで非人称文となるか、不定人称文になるかについても考慮する必要がある。更に形容詞も名詞化したり、また主辞、賓辞、補語の統語関係の線状性から見て、反対にこの品詞が、述語としてもっぱら使われるか否か、という現象の有無についてもそれぞれの言語で分析する必要がある。

文の現実分析という視点からもこのタイプの文を考察する必要が認められる。例えば、先に例示した *Светает.* や *Шел дождь.* は文をテーマやレーマに分解できず、一つのシンタグマを形成している。これに対して、主辞、賓辞、補

語の統語関係を所有する文は二肢文であるから上述の情報の「新」「旧」を意識できる構造であると言える。分析言語がそうした構造を具有しているか、否かも検討されねばならない。

### スラヴ語以外の不定人称文と無人称文

ここでは、印欧語のスラヴ諸語と異なるタイプの言語として、フランス語とロシア語の該当分析を瞥見する。ガーク(1983)は不定人称文と無人称文で認識主体がどのように分けられるかという主語表現について着目し、次の3タイプを分類した。[1]

- 1 名詞か完全な意味を持つ代名詞のある2肢有主文

Pierre parle.; Петр говорит. Я иду. Ты иди!

- 2 独立の意味を持たないいわゆる非人称の代名詞で表現される主語2肢文

Je marche. On sonne. Il pleut.

- 3 一肢無主語文

Parlez!; Иду. Иди! Звонят. Светает.

これらの構造タイプを文のタイプ(一肢・二肢文)と組み合わせることによって以下の様にフランス語とロシア語の主体の特徴を大まかながら把握できる。

第1表: у Гака (1983), ГАРК(1983)による。

文章	フランス語			ロシア語	
	1	2	3	1	3
人称文	+	+	-	+	+
命令文	-	-	+	+	+
不定人称文	-	+	-	-	+
無人称文	-	+	-	-	+

フランス語の非人称の *il* と呼ばれる代名詞は三人称単数にしか用いられず、この構文に現れる動詞も自然現象を表すものや、*fallior, faire, être* など限られている。この種の代名詞はロシア語には存在しない[2]。用法も典型的な文法上の仮主語と認識される。上述のタイプ3はフランス語では命令文である。この言語では動詞文は殆ど全て主語を含む二肢文であり、ロシア語では17%主語の欠落した一肢文がある。無人称文や不定人称文といえ、フランス語は主語のある二肢文であり、ロシア語では一肢文であることによる。更に加えてロシア語と異なり、フランス語の主語はそれが文脈や状況から明らかにできる付加文や独立文でさえ省略されない。このことから当該言語はロシア語に比較して、主辞をとりたてる傾向が顕著であることが判る。

ヴェ. ガークはロシア語とフランス語の会話体での不定人称文や無人称文を一般の二肢文である人称文と比較しそれらの出現頻度を以下のように算定している。

第2表：y Гака (1983), ガーク(1983)による。

文章	フランス語	ロシア語
無人称文	5%	18%
不定人称文	7%	4%
人称文	88%	78%

これによれば、不定人称文はフランス語ではロシア語より倍近く多く使われている。これは、ロシア語では2人称に立つ動詞をもつ主語のない文で表現される一般人称の意味を表現する為に使われる、不定代名詞 *on* を持つ構文がフランス語には存在することに依る。この構文はまた *можно, нельзя* タイプ無人称述語としても働くが、この代名詞は状況ないし文脈から明らかである行為の主体に関しても言及できるので、ロシア語では屢々、具体的人称形で表現される。

ロシア語では不定人称文の数が少ないが、これは主語が出動詞名詞で、述語が、当該過程ないし一般的な形の過程の句を意味する動詞である、人物の不定性が、2肢文によって一再ならず表現されることによって説明される。

ロシア語では他方、不定人称文のもつ文体効果は行為の主体が除去されることによって、それら行為に焦点が集まり客体との連関を中心に表現される効果が期待される。この時、補語は発話の主体を表し、動詞に先行する。他方フランス語では文が主語から始めなければならないため、これらの場合、ヴォイスの変換図式に従い受動、または再帰使役構文が用いられる。

Его любят.

Il est aimé; il se fait aimer.

ロシア語で無人称文がフランス語より3-4倍、多用される理由は、

- 1) 動詞の他、フランス語に存在しない無人称述語副詞を用いた無人称表現が用いられる。それらに対応するフランス語の表現は形容詞述語の人称文である。

Дома весело.

La maison est gaie. (BB)

Дома у нее было тесно.

Sa maison était étroite. (FB)

- 2) ロシア語で無人称文が使われる場合、もう一つの側面として、行為者が状態の受動的な保有者として描き出されるのが通例である。

я хочу → мне хочется; он не спит → ему не спится; он скучает → ему скучно.

- 3) 更に人の心理状態を伝える場合、ロシア語では無人称文が一般的だが、フランス語では人称構文が使われる。

Мне страшно.

J'ai peur

Меня знобило. (ПЗ)

Je frissonnais

Ей хотелось сына.

Elle souhaitait un fils. (PB)

Вам было весело?

Vous vous êtes bien amusées? (BB)

フランス語は名詞に活動的生産者たりうる活動体と、能動行為を自立的に生み出せない不活動体の区別を文法的に行わないため、何れの範疇に属する名詞も主体として立ち得るが、ロシア語での無人称構造は行為(状況)の原因となる不活動実体を造格に表現して用い、当該状況の説明を行う。[1]

Дерево свалило молнией. Дорогу занесло снегом.

La neige a couvert la route.

La route a été couverte de neige.

### 不定人称文について

一般的には不定人称文は主体が省略されている文であるが、例えば Стучат. という文は述語動詞だけからなり、この情景を実現する主体は明らかにされないが、その役割は3人称複数の事柄が遂行していることが推し量られる構文をとっている。この構文は、述語動詞の文法上の数は確定できるものの、それが何人であるのか、定かではない。従って、また過去時制では人称の区別もなされない。行為主体や認識主体が表現から隠れている。科学アカデミー60年文法では、不定人称文はこれらの文の述語は不定人称の人物により実現される行為を表示すると定義されている。また動詞が表示する行為は普通不特定複数の人称と関わるものの、しかし時に複数形が多人数とばかりでなく、明らかに一人の不確定な人物と関わることもある。この場合、主体は対話者に解っているので、呼称されていない。[7]

科学アカデミー70年文法では不定人称文は人称をことさら特定しない人物の行為を表示すると定義されている。[6]

エル・マロエヴィッチはロシア語の不定人称文をセルビア語に対応させ、人称の文法数に注目し、主体が単数にも複数にも解釈できるとしている。[3]

ロシア語

セルビア語

Стучат.

— Неко куца (одно лицо).

一人の人物

Идут.

— Иде (одно лицо).

	一人の人物
	— Иду (несколько лиц).
	数人
Звонят.	— Неко звони. Неко телефонира (одно лицо).
	一人の人物
Тебя спрашивают.	— Тебе питаю.
На улице шумят.	— Наполю неко голами (слышится один голос).
	— Наполю неко галами (слышится несколько голосов).
	複数の人物

彼は、これまでのアカデミー文法の不定人称文に対する定義を洗い直し、次のように、再定義した。

不定人称文は、行為主体が不詳で、特定されず、一括されるか特定され知られはするが行為を強調する目的では、前面に出ないので行為主体が呼ばれない文である。

科学アカデミー 80年文法になるとこれまでの定義の不明確な部分がよりの確に説明される。「不定」に纏わる図式の意味は「特定されない主体に還元される行為ないし進行途上の状態の存在ということである」とされる。[5]

この構文の主辞の「不定性・不明性」は屢々、代名詞の持つ副次的機能に比べられることがある。エヌ・グリゴリエヴァは「現代ロシア語の代名詞の文体的機能」の中で、この問題に触れている。[8]「不定」の意味は文中の文脈で具現化される。斯様な主体を代名詞で語彙化することも可能である。例えば это や кто-то (некто) である。

ロシア語で不定人称文としてあげられる文は二肢文に特徴的な行為や状態の主体が暗黙理に認識されるが、これらの文の内容を分析すると「不定」とされる主体は「行為の明らかでない主体」または「係争中の状況」と捉えられるも

のが多く、その行為者はその限りにおいて一般化 (“вообще всякий, любой”) される実体と、不特定の個人 (“кто-то, некто”) として認識される場合に別れる。また主体者の任意性が強調されたり、これに反して個人としての特定 (“вполне определенный, данный”) 性が打ち出される場合もあり、これらの個々の状況は概ね、文脈から理解すべき性質を帯びている。この様な行為主体は80年文法では「行為あるいは発生中の状態の主体」であるとされる。[5]

ここで注意しなければならないのは、主体という用語自体にもロシア語とセルビア語で語彙論的意味に差異があることである。セルビア語では “субјекат” は主語を暗示するが、ロシア語では “подлежащее” は文法主語であり、“субъект” は語彙論・意味論から見た主体であるという。[3]

ロシア語では一般には、不定人称文での主体は文法数からみると、3人称複数で表現されるが、文として意味論的に解釈するとすれば幾つかのケースがある。エル・マロエビッチは9種類あるとしているがここでは、これに基づき、ポーランド語の例を加味して、整理してみよう。

a) 行為主体が不特定である場合。

(1) В клубе пели и плясали.

クラブで歌が歌われ、民族舞踊が踊られている。

セルヴィア語の不定人称文では述語は3人称単数中性及び再帰形 *се* が使われる。これらの文の行為は若干の不特定の人物によって実現されることがさらに示される。しかしそれはただ一つのそれらの意味というわけではない。行為主体は1人称単数の話者である。

(1-1) У клубу се певало и играло.

ポーランド語では分詞形が使われる。

(1-2) W klubie tańczono i śpiewano.

b) 行為主体が特定される場合。

(2) Тебя зовут к телефону.



君に電話がかかってくる。

ロシア語の不定人称文はセルビア語のそれより意味上、ずっと広義に使われる。ロシア語で不定人称文で表現される場合、セルヴィア語では人称文で表現される傾向にある。また仮に行為の主体が一人の不定な人物である場合（3人称単数）、セルビア語では不定代名詞を伴う人称文が立つ。

(2-1) Неко (неки човек; нека жена) те зове преко телефона.

この意味でロシア語も同じく不定代名詞を伴う人称文が立つが、それは、不定人称文のシノニムにすぎず、主体の不確実性は確実に失われる。

(2a) Вам кто-то звонил. — Вам звонили.

ポーランド語では再帰動詞が用いられる。

(2-2) Proszę cię do telefonu. Либо: Jesteś proszony (proszona) do telefonu.

c) 行為主体が不特定で文法数の上から単複を精査できない場合。

(3) Из кустов стреляли.

灌木の間から射撃音がした。

セルビア語では、この様な場合、不定人称代名詞つき人称文が用いられるが、行為主語が文法数の関係で不定、つまり確定できない場合用いられる。

(3-1) Из жбугъа је неко пуцао.

ポーランド語ではやはり分詞形が用いられる。

(3-2) Strzelano za krzaków.

d) 行為の主体が話者自身である場合

(4) Не хочу я, говорят тебе! — возразила Настенька.

ナースチェンカがさからった。「あなたに言うだなんて私、したくない。」

ポーランド語では3人称単数の人称文で表現される。

(4-2) *Ja nie chcę, mowi się do ciebie — sprzeciwiła się Nastusia.*

e) 行為主体が3人称の特定人物の場合

(5) *Ona była doma. On велел доложить о себе: его тотчас приняли.*

彼女は在宅でした。彼は自分のことを報告するように命じた。その時彼はその職に就いた。

ポーランド語ではやはり、分詞形が一般的である。

(5-2) *Ona była w domu. On kazał zapowiedzieć się: natychmiast go przyjęto.*

f) 行為主体が具体的人物だが不特定と見なされる場合

(6) *И ты знай: пока я жива, у тебя есть место, где тебя ждут, всегда ждут.*

ポーランド語では3人称複数の不定人称文である。

(6-2) *I pamiętaj: póki żyję jest miejsce, gdzie na ciebie czekają, zawsze czekają.*

*Либо: I pamiętaj: póki żyję jest miejsce, gdzie jesteś mile widziany.*

g) 述語の意味の連想から、行為が何らかの場所と(現実に、潜在的に)、関連づけられ、概括化される。

(7) *Здесь продают билеты на концерты.*

コンサートの切符がここで販売されている

述語がただ、何らかの場所に(現実に、潜在的に)、関連づけられる行為を指示する程に、概括化される行為主体の場合かさらに補語を有する場合、セルビア語では人称受動構文が用いられる。

(7-1) *Овде се про дај у карте за концерт.*

ポーランド語では再帰構文が使われる。

(7-2) *Tutaj sprzedaje się bilety na koncerty.*

露語ではこの意味では人称受動構文も可能であるが、シノニムにすぎない。

(7a) Здесь продают билеты на концерты.

— Здесь продаются билеты на концерты.

ロシア語のこれらの表現はポーランド語では再帰構文が一般的である。

(7-2) Tutaj sprzedaje się bilety na koncerty.

h) 行為主体の提示が誰かが蒙った行為を述語が表すまで背後におかれ、延期される場合。

(8) Его убили на войне.

彼は戦争でなくなった。

ポーランド語では再帰形と不定人称文の双方がある。

(8-2) Zabito go na wojnie. Либо: Zabili go na wojnie.

i) 行為主体に関する提示が省みられず、それゆえ、動詞の形が連辞付き名詞の意味で表現される場合。

(9) Как тебя зовут? — Меня зовут Сергей Александрович.

あなたのお名前は？私の名前はセルゲイアレクサンドロヴィッチです。特にロシア語の不定人称文からセルビア語へ翻訳される場合、これらの文の幾らかは仮に、行為主体の表示が控えめになり、動詞が人を意味する補語を有する場合には、合成名詞述語によって、翻訳される。

ロシア語

セルビア語

(9) Как тебя зовут?

(9-1) Како је твоје име?

(9-1a) (Како ти је име?)

(2)(10) Кого хоронят?

(10-1) Чија је то сахрана?

ポーランド語では人称文である。

(9-2) Jak się nazywasz? — Nazywam się Sergiej Aleksandrowicz.

不定人称形はロシア語では動詞が補語を有するか否かに関わらない。

(11) Здесь много строят. — Строят новый завод.

セルビア語では仮に動詞が補語をとらなければ、不定人称構文となるが、補語があれば人称構文をとる。

(11-1) Овде се много гради. — Гради се нова фабрика.

ポーランド語では再帰受動，二人称及一般人称文び三人称不定人称文が可能である。

(11-2) Tutaj dużo się buduje. Buduje się nową fabrykę. Либо: Budują nową fabrykę.

行為主体の役に当たるのは1人称複数以外に3人称複数との話者でもある。時に文脈でだけ，定義できる場合や，行為主体になるのが一人であったり，若干名であったりする。

(12) Иди скорее, тебя ждут.

早く行きなさい，待っているのだから。

セルビア語では述語に補語をとらない完了体が来る場合に被動形動詞過去中性形単語尾と動詞連辞の非人称形不定人称構文が用いられる。

(12-1) Наложено ми је да вас дочекам.

ロシア語ではこの場合，同義構文として不定人称と無人称文が用いられる。

(12a) Мне поручили встретить вас. — Мне поручено встретить вас.

仮に行為主体となるのが具体的な人物であるが，文脈から明らかだとか，会話に現れている人物であるとかで，言及されないケースではセルビア語では行為の現実的主体を用いた人称能動構文が用いられる。

ポーランド語はロシア語と同じ三人称複数を主体とする不定人称文である。

(12-2) Idź szybciej, czekają na ciebie.

挙げられたような主辞の提示は，文の現実分析の立場から眺めると，比較的理解しやすいように思われる。不定人称文での文意伝達の主眼は情報の古い部分（「テーマ」）ではなく，その構造上新しい部分（「レーマ」）にあると考えられる。この様な構造では，主体の取り立てが問題の主要部分ではなく，主体の働きかけの結果に焦点が据えられるため，主体の表現に関しては，矛盾する内容



- (18) Кругом зазеленелось.                   Кругом все зазеленелось.  
 (19) Зарябилось в кустах (Даль).   Что-то в кустах зарябилось.

上述の文例で、さらに主語の代名詞の省略を持つ文がある。スロヴァキア語と比べよう。

- (20) Вдали что-то загудело.  
 (20-3) V diaľke zahučalo.                   V diaľke čosi zahučalo.  
 (21) Мне снится, что-ли!  
 (21-3) Sníva sa mi, či čo?                   Sníva sa mi niečo...?

### おわりに

本稿では、ロシア語の不定人称文とそれに相応するセルビア語などの構文の相互関係を比較分析の手法で確立しようとした。

多言語を対照して比較し、その相互関連を解明するのは大変複雑であるものの、ロシア語とポーランド語、スロバキア語、及びセルビア語の間には、ロシア語とフランス語との間の関係とよく似ていると言う結論に至った。

特に文の主辞、賓辞、補語の統語関係を軸に分析すれば、その言語の現状を理解する上で種々の事実が明らかとなる。本稿で取り上げる不定人称文は各言語での主辞の概念のあり方を把握する上で重要な糸口を与える。フランス語では非人称の *il* と呼ばれる代名詞は自然現象を表す場合、三人称単数にしか用いられず、この構文に現れる動詞も自然現象を表す場合などにかぎられる。文法主語は必ず表記される。ロシア語では現在時称の場合三人称単数が用いられるが、主語は表記されない一肢文である。ロシア語にセルビア語・ポーランド語・スロバキア語を比較した場合にはある場合には不定人称文に、またある場合には、無人称文に、更に第三の場合には異なるタイプの人称文が対応する。ロシア語は三人称複数の不定人称文で表現できる概念が、これらの言語では、再帰表現や分詞構文にあたる場合が多いことに気づく。これはこれらの西・南スラヴ語が、基本的に主辞と補語との関係を重視している、ことに依るものと

思われる。これに対して東スラヴ語のロシア語は記述の中心が賓辞と補語にあると捉えることが可能であるため、動詞不定法が中性名詞化たり、名詞が賓辞として使われたり、形容詞短語尾が賓辞の核になり得るなどの現象が活発化しているのである。(Пожар. Если вам интересно знать,...) この研究の副産物として、ロシア語の不定人称文を他のスラヴ語の二枝文との対応関係から同義文を導き出すことができた。それはこれら言語間の翻訳の諸問題分析のための基礎として役に立つであろう。

本稿を準備するにあたって、GDAŃSK 大学の Alicja Pstyga に資料を戴くことが出来た。茲に深甚なる謝意を表する次第である。

## ЛИТЕРАТУРА

- [1] В. И. Гак Сравнительная типология французского и русского языков изд. 2-е «ПРОСВЕЩЕНИЕ» М. 1983.
- [2] 数江穰治 フランス語のABC 白水社 東京 2001
- [3] Мароевич Р. Неопределенно-личные предложения в русском языке и их сербские эквиваленты (О соотношении сопоставительной лингвистики и теории перевода) // ВЯ № 2. 1993.
- [4] Корди Е. Безличные конструкции в современном французском языке (Синтактико-derivационный и типологический подход) // ВЯ №3. 1994.
- [5] Русская грамматика, АН СССР, т.2, Изд. «Наука», М. 1980.
- [6] Грамматика современного русского литературного языка / Отв. ред. Шведова Н.Ю. М., 1970. С.564.
- [7] Грамматика русского языка / Ред. коллегия: Виноградов В.В., Истрин Е.С. Т. II. Ч. 2, М., 1960.
- [8] Григорьева О.Н. Стилистические функции местоимений в современном русском языке // Слово. Грамматика. Речь. вып. 4, Кафедра русского языка для иностранных учащихся филологического факультета МГУ им. М.В. Ломоносова, М. 2002.
- [9] Ямагучи И. К категории числа в русском языке // STUDIA PHILOLOGICA PALAEOUSSICA IX, сс. 123 -143, Древнерусское общество в Японии, Нагоя, 1968.
- [10] Ямада И. Вопросы местоимений системы в некоторых славянских языках // «Муза», Осака, 2003.

## РЕЗЮМЕ

В настоящей работе мы пытаемся установить соотношение русских неопределенно-личных предложений и соответствующих конструкций в сербском и в других славянских языках методом сопоставления.

Очень трудно проводить сравнение между несколькими языками и выяснить их соотношение, но мы пришли к заключению, что отношение между русским и другими славянскими языками похоже на отношение между русским и французским языками. В частности если проанализировать синтаксические отношения подлежащего, сказуемого и дополнения в предложении, выясняются различные факты, помогающие понять настоящее состояние анализируемых языков.

Неопределенно-личное предложение, которое мы исследуем в настоящей работе, помогает понять сущность субъекта в каждом языке. Во французском языке при обозначении природных явлений местоимение *il* используется только в форме 3 лица единственного числа и значение глаголов, которые употребляются в этой конструкции, ограничено только выражением природных явлений. В нем грамматическое подлежащее обязательно выражено, а в русском языке в настоящем времени в данном случае это односоставное предложение, в котором сказуемое выражено в 3 лице единственного числа, а подлежащее не выражено. В сербском же языке в одних случаях неопределенно-личные предложения соответствуют указанным русским предложениям, в других — особым безличным конструкциям, а в третьих — личным предложениям разных типов. Нам кажется, что понятию, которое может выражаться неопределенно-личным предложением в русском языке, в других славянских языках соответствует возвратная или страдательная причастная конструкции. Кажется, что в западнославянских и южнославянских языках усиливается связь подлежащего и дополнения. Наоборот, в русском языке, который принадлежит к восточнославянским языкам, центром выражения является сочетание сказуемого и дополнения, обнаруживается тенденция развития связи гла-



гола с дополнением, так что имя существительное среднего рода, существительное в роли сказуемого, а также краткое прилагательное могут функционировать как ядро предложения. Наш настоящий вывод будет полезным для того, чтобы рассмотреть о будущем развитии эргативных и аккумулятивных языков, включая грузинский и русский языки.

Как второстепенный результат нашей работы мы можем указать на тот факт, что для других славянских языков более характерны двусоставные предложения, тогда как в русском языке им соответствуют разные типы односоставных предложений. Вышеуказанный результат очень полезен как основа анализа вопросов перевода рассматриваемых предложений с русского на другие славянские языки и наоборот.